
出土文物からみた平安時代の儀礼の場とその変化

高橋照彦

儀礼を執り行うためには、それを彩る様々な舞台装置（以下、儀式装置と仮に呼ぶ）が用意される。そのような儀式装置のうち、土中から掘りだされた文物、特にその中でも普遍的な存在である土器と瓦を以下では取り上げて、古代都城の権力表象の場と儀礼の問題を考えるための材料を提供することにしたい。

①……………儀式用食器としての鉛釉陶器

まずは、古代の文献で「瓷器」あるいは「青瓷」として記されている^(註1)国産の鉛釉陶器^{えんゆうとうき}を俎上に載せてみたい。鉛釉陶器と言うのは、著名な「正倉院三彩」を代表とする緑色あるいは白色や褐色の上薬を施した焼物のことで、酸化鉛を釉薬の主成分とすることからその名がある。鉛釉陶器のうち奈良時代のものは「奈良三彩」と総称されており、平安時代には基本的に緑釉一色になることから、「平安期緑釉陶器」あるいは単に「緑釉陶器」と一般に呼ばれている。

さて、この鉛釉陶器の使用法を文献史料や遺跡からの出土状況で確認すると、いくつかの用途が導き出される^(註2)。なかでも重要な機能を占めるのは、本稿で問題とする儀式あるいはそれに伴う宴会の場での使用方法である。

その1・2例を挙げると、元日節会・七日節会・踏歌節会といった正月の三節において節会の最初に「三節御酒」^{さんせちみき}が供されるが、その酒杯に「瓷器」「青瓷」が用いられているのである^(註3)。「三節御酒」は甘糟と注記されているもので、いわゆる三献^{さんけん}^(註4)の前に出されている。饗宴において三献までは儀礼的側面が強いことはよく知られている通りであり^(註5)、それに先立つ「供（三節）御酒」は儀礼的な色彩がさらに濃厚なものと判断される。ここに、儀式用食器としての性格を持った瓷器の存在を見い出すことができよう。

しかも、正月節会では「三節御酒」が節会に参集したすべての人に供されるのではなく、主上および太子のみが対象であって、臣下には供されない点も注目される。いわば君臣の上下の秩序を明確化するために、瓷器、すなわち鉛釉陶器という土師器や須恵器と比べれば色鮮やかで光沢を放つ高級器物を用いることによって、儀式の場が演出されているものと言える。

用例としては他にも、精進物を食して一年の健康を祈る儀式である正月の歯固^{はがため}の場でも「瓷器」の皿（盤）が確認できる^(註6)。また、後に七夕の行事となることでも知られる乞巧奠^{きっこうてん}においても酒杯などとして尾張で作られた青瓷が用いられている^(註7)。このように、儀式あるいは権力関係が表

象されるような国家的な饗宴において酒器あるいは食膳具として瓷器・青瓷が重視されていることがわかる。

考古学的側面からは機能を限定するのは困難ながら、そのような儀式あるいは饗宴での緑釉陶器の重視を窺わせる出土例も挙げることができる。例えば、平安京の冷然院跡では、9世紀前半代頃の精緻な陰刻花文や緑彩文が施された緑釉陶器がまとまって出土している(註8)。当該期の冷然院で注目したいのは、嵯峨天皇のもと、詩宴、つまり漢詩の宴がしばしば行われていたことが知られる点である(註9)。この頃の緑釉陶器は、金銀器や青磁・白磁といった中国文物の形態を模倣しており、唐風の装いを持った国産最高級の焼き物である(註10)。中国文物の流入量が必ずしも潤沢ではない当該期において、緑釉陶器こそが冷然院の詩宴で用いられる器として最適な存在であろう。厳密な論証は困難ながら、良質の緑釉陶器のまとまった出土は、詩宴のような饗宴での使用を抜きには考え難い。この例は平安宮内で行われるものではないけれども、天皇を取り巻く場の饗宴において緑釉陶器が重要な位置を占めていたことを示す考古資料の一例とすることができよう。

都城以外の出土例としては、9世紀代に国府などの地方官衙を中心に緑釉陶器のまとまった出土が見られる。地方官衙では都城を縮小した形での儀礼が行われていたと想定される(註11)が、そのような儀式での器物として緑釉陶器が使用された可能性が高い。

また、陸奥の鎮守府になった岩手県胆沢城からは、9世紀前半代に遡る尾張産緑釉陶器がまとまって出土している点も注目される(註12)。先に触れた冷然院などの平安京の中核的位置を占める遺跡を除くと、全国的にはほとんど分布が認められない9世紀前半代に、良質の緑釉陶器がいち早く律令国家の北端にまでもたらされたのには、なんらかの理由あるいは背景を見出すべきであろう。

既に指摘されているように、鎮守府、胆沢城内でも都城や国府で行われていたのと同種の各種儀礼が行われていたことが想定され(註13)、やはりそのような儀礼的な場において緑釉陶器が使用されていたことは予想される。なかでも注目したいのは、鎮守府内で正月と五月の節宴が催されている点である。今泉隆雄氏は、この両節宴において鎮守府の官人や胆沢郡以北の5郡の郡司だけでなく、この時期の史料に見える「俘囚」、すなわち蝦夷の民も参列していたと推測している(註14)。饗宴の存在意味は、もちろん共同飲食による親和関係を形成する側面が重要ながら、宮内で行われていたと同様に鎮守府での元日節宴などでも身分の上下を確認する儀礼的な場面も存在したはずである。そうだとすれば、やはり「三節御酒」を供することは当然行われていたであろうし、その際に緑釉陶器が使われていたことは想像に難くない(註15)。鎮守府への良質の緑釉陶器の搬入が全国に先立つ形で行われたのも、俘囚との文化的優越性を誇示せんがための用途として緑釉陶器が必要不可欠とされていたものと推測される。それは、律令国家が北方に対する政策をいかに重視していたかを如実に物語るものとも言えるであろうし、おそらくちょうどこの弘仁期頃が蝦夷との戦争が終結し新たな曲面を迎える時期であったこととも関連する動きと言えるだろう(註16)。

いずれにせよ、出土資料からみても緑釉陶器が国家的な饗宴などで重視されたという想定と呼応する事例を認めることができるのである。

②……………瓷器生産の変質期と儀式の変化

それでは、上述のような儀式における瓷器の使用はいつから始まったのであろうか。この点について、まず瓷器の本格的生産の開始する奈良時代から検討してみたい。奈良時代までの鉛釉陶器、奈良三彩の使用法は、大雑把に言えば仏事や祭事に関連する使用方法が主であったと推測される(註17)。例えば、いわゆる正倉院三彩は、底部外面の墨書からも明らかなように、供養具、つまり仏具として用いられたものであり(註18)、文献史料から考えても奈良三彩の多くは仏事に使用されていたものと推定される(註19)。また、各地の出土例においても小壺と言われる文字通り小さな壺は祭祀関係の遺跡を中心に出土しており、多嘴瓶や鉢・盤などが寺から出土し、蔵骨器とみられる大型の壺は墳墓の出土というように、奈良三彩の基本的性格は仏事や祭事、あるいは葬送用の器物となっている。つまり奈良時代の使用法は、あくまで仏や神へ捧げるための容器であり、広義の儀礼に含まれるかもしれないが、饗宴などで人が食するための器とは異なる。平安の儀式書などにみられる使用法とは同等に位置づけることができないのである。

ところが平安時代になると、椀や皿といった食膳具形態の鉛釉陶器が量的な主体を占めるようになる。乞巧奠で使われた「尾張青瓷」すなわち尾張産の緑釉陶器の生産開始も平安初めとみられる。このように、平安時代以降、食膳具としての機能を持つ容器としての使用法が始まるものとみられるのである。その年代は、平安京などでの出土例から推測すれば、9世紀前半、特に弘仁期頃に遡ることはほぼ確実であろう。

この平安時代初めの画期により限定的な年代を求めると、弘仁6年(815)頃に押さえることができるものと思われる。ここでは細かな検討を行わないが、種々の議論が重ねられてきている『日本後紀』弘仁6月正月丁丑条のいわゆる「弘仁瓷器の伝習記事」において3人もの尾張出身の造瓷器生が官人として取り立てられていることや、考古資料からはこの弘仁期頃に尾張産施釉陶器の出土がみられるようになることなどから、この記事の背後に尾張における緑釉陶器生産の開始が企図されていたことが推測される(註20)。そして、尾張の生産開始が供膳形態中心の新たな緑釉陶器生産の幕開けを告げるものであることから、この記事の弘仁6年(815)頃が、上記のような儀式における瓷器の使用開始とも結び付く可能性がきわめて高い。それに、正史においてはほとんど取り上げられることのなかった土器生産部門において、このような伝習の記事が載せられている理由としては、国家的な儀式の場における使用法の開始を考えれば、おそらくごく自然に解釈できるのではないだろうか。

このように、弘仁6年頃には、緑釉陶器が器種構成として椀や皿といった供膳形態を中心とした生産内容となり、饗宴などで多用されるようになったものと判断されるのである。そして、この弘仁期頃の緑釉陶器の変容で注目したいのは、その器形の変化である。緑釉陶器はこの時期に以前にない器形を採用することになるのである。そこには先述のように中国製の文物の模倣があったものと考えられる。つまり、弘仁6年頃を変質の画期として、唐風文化を体現し、君臣上下関係を明示する儀式用食器として鉛釉陶器が位置づけられるようになるものと言える。この弘仁年間あるいは嵯峨朝と言うのは、今更言うまでもないが、唐風文化の興隆期であり、儀式体系が整備される時期

でもある。先の鉛釉陶器の変質はそれと軌を一にする動きと言えるわけで、儀式の場を彩る器物からもこの時期の変化が明瞭に示されていることになる。

③……………緑釉瓦葺き建物と儀式の場

以上では、鉛釉陶器という具体的な素材により弘仁期頃の儀式の変容を考えたが、この時期前後の儀式の場の変化を、緑釉が施された瓦からもう少し見てみたい。

施釉瓦は奈良時代からも平城宮の東院などで用いられているが、出土量は必ずしも多くない。それが、平安時代になると、平安宮では豊楽院や朝堂院など権力中枢の建物跡で緑釉瓦がまとまった量の出土を見せるようになる(註21)。またそれは、奈良時代の施釉瓦が平城京の左京二条二坊から三坊にかけてなど、むしろ宮外に集中的な出土地点が見られるのとは、対照的な状況を示している(註22)。それに、奈良時代では三彩を施釉するものが全体の9割以上を占めているが、平安時代ではほとんどが濃緑色釉の単彩であり、しかも奈良時代では大多数を占めるのが平瓦であるのに対し、平安時代では軒丸・軒平瓦や丸瓦・熨斗瓦などに濃緑色釉が施され、平瓦には施釉品がほとんど認められない。平安時代は、軒先や棟に集中的に緑釉単彩瓦を葺いていたことが想定され、奈良時代のあり方と一線が画されることは明らかであろう。このように、平安時代になって権力を表象すべき中枢的な建物に緑釉瓦を葺くことが盛行し、施釉瓦を葺くことに新たな意義づけがなされたものと判断される(註23)。

この緑釉瓦の平安京における採用時期については、いまだ十分に証明されるには至っていないものの、どうやら朝堂院では遷都直後の段階には緑釉瓦は葺かれておらず、豊楽院造営にともない緑釉瓦が葺かれ始め、朝堂院は弘仁6年(815)の修理にともない緑釉瓦が葺かれるようになったようである(註24)。もしそうだとすると、当初朝堂院に緑釉瓦が葺かれなかったのは造営を急ぐためのやむを得ない事情であり、おそらく豊楽院の緑釉瓦化は平安遷都当初から企図されていた可能性があるだろう。そして、弘仁期すなわち810年代頃に豊楽院・朝堂院における緑釉瓦化が完成するものと言える。

この緑釉瓦の動向は、実のところ、先に取り上げた緑釉陶器とも連関する側面をもっている。詳しくは先に述べなかったが、鉛釉陶器生産において、奈良三彩から平安期緑釉陶器への変質は既に桓武期に始まっている。つまり、その時期に既に弘仁期に見られるような淡緑色釉単彩を施すようになり、形態としても部分的に唐風文物の模倣が始まっているのである(註25)。ただし、先述のように国家的饗宴に用いられる食器としての位置付けを与えられたのは、弘仁6年(815)頃なのである。細かい点の差違はもちろんあるわけだが(註26)、桓武期に一つの方向性が示され、嵯峨朝段階に完成点に達するという点で、緑釉陶器と緑釉瓦は同様の変遷を辿っているものと捉えることができる(註27)。

さて、緑釉瓦の問題に話を戻すと、平安京外での平安時代の緑釉瓦の出土は、管見の及ぶ限り、東北の徳丹城の資料が唯一である(註28)。これは、803年築城の志波城にもともと葺かれていた緑釉瓦が、志波城の移転に伴い徳丹城に運ばれたものと推測されている(註29)。先に述べたように、平安初期の平安京では権力表象の場の建物に緑釉瓦葺きが採用されるが、蝦夷支配の最前線での緑釉瓦の

使用は、時期的にも内容的にも平安京でのあり方の延長上にあるものと判断される。

ここで想起されるのは、桓武の2大政策が「軍事と造作」、つまり征夷と造都であったことである。出土数の多寡はあるにせよ、緑釉瓦が葺かれたのは平安京と城柵であり、先述のように弘仁期頃の良質の緑釉陶器の出土がまとまっているのもその2つの地域であるわけだから、桓武の2つの政策の対象と奇しくも一致していることになる。この桓武の政策路線は、よく知られている通り、延暦24年（805）の藤原緒嗣・菅野真道によるいわゆる徳政論争を機に途切れることになる。しかし、実質的な内容としては変質が加わりながらも、その2つが国家的重要眼目であるという点は生き続けていたことを、上記の考古資料は示しているであろう。それはまた、桓武朝が新規拡大の方針とすれば、嵯峨朝が儀式やその場の整備といった内実の改変という形を採って、国家の2大関心事を処理しようとしたことを示唆するものでもあろう。

これとも関連して触れておきたいのは、地方官衙としての国府の状況である^(註30)。8世紀後半から9世紀前半頃にかけて、国府政庁の建物が礎石建物・瓦葺化し、朝廷が整備される動きが起こるのも、朝廷という場における国家的な儀礼の存在が背景に考えられるであろうし、平安京など中央における先のような儀式の場の整備とも関連させて捉えることができるであろう^(註31)。また、同様の動きは、大同年間に山陽道の駅家に瓦葺き粉壁を命じることにも見出すことができよう^(註32)。ここには、瓦による舞台装置により国家的威信を示そうとする意図が9世紀前半頃にいかに強かったかを窺い知れるのである。

以上、緑釉陶器と緑釉瓦を中心に見てきたが、それらだけの検討を通してでも、平安初期前後には国家的な儀式を行うに当たっての舞台装置が新たに産み出されており、天皇を頂点とする秩序維持のために国家的儀礼の整備に対して強い関心が払われていたことが窺われるであろう。時期的に整理してみれば、平安京への遷都は、特に権力表象あるいは儀礼の場としての都城の様相において1つの画期をなすものと判断され、それが舞台装置の全面的な唐風化を押し進める形で一応の完成点をなすのは弘仁期前後とみられるのである。

④……………白色土器と儀礼

それでは、再び土器・陶磁器に戻り、緑釉陶器と対照させる意味で興味深い存在である、白色土器と呼ばれる焼物の動向に注目してみることにはしたい。白色土器とはまさに白色を呈する素焼き、すなわち無釉の焼物である。それは、生産の始まった9世紀頃では、平安京周辺産の緑釉陶器の素地、つまり施釉されていない緑釉陶器と呼ぶべきものであったが、10世紀頃から緑釉陶器とは少し異なる独自の形態を採るようになり、おそらくその生産も白色土器をほぼ専焼する体制に移行するものとみられる。この白色土器の生産地については、いまだ窯そのものの確認はなされていないが、緑釉陶器も生産していた京都洛北、栗栖野の地とみられる。ここでは細かな考証を行わないが、おそらく文献に見える「栗栖野様器」や「栗栖野土高杯」はこの栗栖野産の白色土器を指すものと推測される^(註33)。

さて、文献から窺える「様器（やうき）」の用途としては、例えば、大臣大饗を初めとする饗宴において三献までに使用される盃が挙げられる。四献以降に用いられるのは普通の土器、いわゆる土

師器であるから、それとは異なり、より儀礼的な機能が様器に与えられていたことが明らかである。様器はその他にも儀式的な様々な饗膳の場で使用されていることが、文献史料により知ることができる(註34)。

そして、様器に当たるとみられる白色土器の出土状況としても、平安京以外ではほとんどその出土がみられず、しかも10世紀以前で大量に出土しているのは内裏周辺などに限定されている。例えば、出土土器の破片数に基づく構成比率からすると、京内では一般に白色土器は1%にも満たないが、内裏SK25では6.3%、土師器を除く小型供膳形態でみれば実に70%近くを占めているのである(註35)。おそらくこのことから考えて、白色土器には内裏などでの儀礼的な特殊な用途を想定するのがよいものと思われ、文献史料の内容と対応させることが可能である。

それでは、この様器の性格付けを深めていくために、様器が使われる例の代表としての大臣大饗を特に取り上げてみることにしよう。ここでまず注目したいのは、儀式内容の観点からなされた倉林正次氏による興味深い指摘である(註36)。倉林氏は、大臣大饗では尊者を先頭に大勢の客が乗り込んでくるが、この様子は祭りにおいて遠くから練り込んでくるマレビト神の一行の面影がみられるものと指摘し、「同じ正月の儀礼でも、元日の朝賀などはすっかり中国風のものになってしまったが、この大臣大饗にはわが国在来の古い宴会の姿がうかがわれる」と結論づけているのである。

大臣大饗は大きく見れば拝礼一宴会の2部から構成され、その拝礼が朝賀とすればそれに続く宴会は元日の節会となる。また倉林氏の別の論文によれば、朝賀に対応する宴会としては、むしろその性格から元日節会よりも白馬節会を位置付けるほうがふさわしいとされている(註37)。いずれにしても、大臣大饗の拝礼一宴会に対して、朝賀一節会という関係が見い出されるであろう。倉林氏の先の指摘に戻ると、それは元日朝賀と大臣大饗の拝礼部分を対比したものであるが、正月節会と大臣大饗の宴会という両者の舞台装置でも似たような対比的様相が認められるのである。その儀式装置として挙げたいのは、先から触れてきた三献の際に用いられる盃である。

大臣大饗において三献に用いられるのは、先に述べたように様器、つまり考古資料で言うところの白色土器である。一方、正月節会の三献の際には、「節会盞」あるいは「所司盞」と一般に呼ばれる盃が使用されている。この節会に用いられる盃の実態は何かといえ、旬日の三献の際に誤って節会盞を用いたことから土器に替える例がしばしば確認でき、『小右記』寛弘2年10月1日条では「二献盃用節会盞、仍左府追却、改土器盞(一献用土器、何更二献用朱漆盞乎)」とされているように、節会で用いられていたのは明らかに朱漆の盞(酒杯)であることがわかる。そして、これも見たとように、正月節会において三献の前に供される三節御酒の酒器には緑釉陶器が用いられている。このように、大臣大饗では、素焼きという点では土師器と変わるところがない簡素な白色土器が使われているのに対して、正月節会では、朱漆器や緑釉陶器というカラフルな器が用いられているのである。

このように対置される関係は、その両者の饗宴が執り行われる建物、特にその屋根構造の上でも認めることができる。個別の大臣大饗の行われた建物について実物資料から追証するのは困難ながら、大臣大饗が行われたような上級貴族の邸宅は、発掘資料や少し時期の下るものながら絵巻などから見て、檜皮葺きの建物であった可能性が高い(註38)。それは屋根構造からすれば、伝統性の象徴とも言える内裏と共通するものである。そしてまた、白色土器がまとまって出土するのは先述のよ

うに内裏付近であることから、大臣大饗の場合と同じく檜皮葺き建物での饗宴において様器、白色土器が重要視されていることが確認されよう。

一方で、元日朝賀が行われた朝堂院は、先述のように衣服から儀礼内容まで唐風化が推進された弘仁期において緑釉瓦に葺き替えられたものとみられる。そして、朝堂院に緑釉瓦が葺かれるようになった弘仁の後期に正月節会が行われている豊楽院も、緑釉瓦葺きの建物である。さらに、正月以外の節会についても付け加えると、例えば相撲節や重陽節などがあるが、これらは弘仁の頃には神泉苑で行われている。この神泉苑の発掘調査でもやはり緑釉瓦が出土しており、乾臨閣などでは緑釉瓦が葺かれていた可能性が高い(註39)。このようにみえてくると、唐風の国家的儀式や饗宴を行う場に限定されて緑釉瓦が葺かれていたことが推測される(註40)。つまり、緑釉の瓦が葺かれて唐風の装いに仕上げられた建物において、緑釉陶器や朱漆器という色鮮やかな器によって国家的な饗宴が執り行われていたことになる(註41)。

以上みてきたように、豊楽院や神泉苑を代表とする緑釉瓦の葺かれた建物での緑釉陶器・朱漆器を用いる節会と、内裏などを典型とする単色で簡素な檜皮葺きの建物における白色土器を用いた饗宴が対置されることになる。その視覚的対照は実に鮮明であろう。もちろん大臣大饗でも漆器が使われるなど華やかな色彩により彩られる側面がある。しかし、三献という儀式的な酒礼の部分に、その饗宴の性格が象徴的に示されているとみるならば、その儀式装置の明らかな差異の意味も汲み取るべきであろう。それは、前者を「多色彩の酒礼」、後者を「単色彩の酒礼」と呼びわけうるものではなかろうか(註42)。

⑤……………儀式装置からみた饗宴の性格

前節のような儀式の舞台装置における対比は、元日朝賀一節会と大臣大饗との儀式内容の差異と対応している可能性がある。そこで想起したいのは、先に引用した倉林氏の所説である(註43)。倉林氏の指摘のように、前者を中国風の新たな装い、後者を日本古来の伝統的装いというように2大別すると図式的にはわかりやすい。ただし、単純に両者をそう結論づけてよいかは、今少しの検討を要するところであろう。ここでは、これまでに取り上げた三献の盃と屋根構造という特殊な側面からではあるが、その点に触れてみたい。

まず、朝賀一節会に関わる緑釉瓦についてだが、緑釉瓦は唐・長安などの宮殿建築で採用されていたものと判断され、渤海などでも採用されていること(註44)から、やはり唐風の屋根構造と言ってよいだろう。また、緑釉陶器についても、中国文物の模倣形態であることは既に述べたとおりである。朱漆器については、残念ながらその現物を確認できないため、緑釉陶器のような比較は難しい。しかしながら、黒漆器の出土資料について見る限りでは、ほぼ緑釉陶器と連動するように、9世紀になって形態の変化が生じ、中国文物の模倣形態になる。おそらく、朱漆器も黒漆器と同様の形態であった可能性が高い。また、奈良三彩と異なる意匠を採った新生の緑釉陶器は先述のように弘仁期に成立するものと見られるが、朱漆器自体が出現するのもほぼ同じ9世紀前半頃と想定されるのである(註45)。とすれば、やはり緑釉陶器と同じ動きの中で捉えるべきであろう。

このように、朝賀一節会に関わる舞台装置は、確かに中国風であると言えるだろう。ただし、す

べてにわたって中国そのものを忠実に再現したわけではない。中国での当時の食器の在り方は、金銀器を初め、青磁・白磁・黒釉磁など様々な材質と多様な色彩で構成されていたものと思われる。一方の平安時代の食器の構成は、金銀器に朱漆器・黒漆器に緑釉陶器・灰釉陶器、黒色土器や須恵器・土師器というように、確かに奈良時代と比較して材質と色彩の多様化が著しく、その背後には中国風の多色彩の容器が指向されていた可能性が強い。しかし、日本では当該期に磁器を生産する技術はなく、あくまで施釉陶器と呼ぶべき部類に属する焼物しか存在しない。つまり、実体として見れば、中国とはまったく別の様相と言わざるを得ない。それは、平安宮の大極殿が唐長安と規模・構造を異にし、平安宮の朝堂院では龍尾壇を設置したといっても、唐長安の龍尾道とはやはり著しく異なることと相通ずるものである。このように、その儀式装置としては唐代文化そのものの移入ではなく、あくまで唐風というのが適切なところであろう。

それではもう一方の大臣大饗についてみていくことにしよう。まず、盃としての白色土器は、素焼きという点では実に伝統的な焼き上がりを示しており、先に記したように縄文・弥生土器の系譜を引く土師器と近似する。しかし、その形態はもともと緑釉陶器と共通していたように、唐風ともいえる平安時代に新たに始まった椀や皿の形である。また、その製作の技術も、この段階の平安京の土師器がロクロを用いない手づくねの成形であるのに対し、白色土器はやはり緑釉陶器と共通してロクロ成形である。また白色土器は、ロクロからの切り離しに糸切りを用いており、9・10世紀の段階には高台を削り出し手法によって作っている。これらも土師器の技術、あるいはより広く伝統的な畿内の窯業生産の技術をみても辿ることができない、平安時代の新たな要素である。したがって、白色土器は素焼きという点で伝統的な要素を持つが、純粋に日本古来のものなのではなく、緑釉陶器と言う唐風文化の洗礼を受けた上での産物なのである。

一方の檜皮葺きという屋根構造については、掘立柱の建物構造を採ることに象徴されるように伝統を継承する内裏に採用されている。しかし、この檜皮葺きの伝統は必ずしも古いものではない。宮の関係では、例えば飛鳥板蓋宮がことさらに板葺きであることを強調しているように、この段階は檜皮葺きが採用されていないものとみられる。いつから檜皮葺きが内裏で採用されるようになったのかは定かでないようだが、現状では平城宮段階と考えられている^(註46)。また、このような植物質の素材の屋根構造に対し、瓦葺きは当初百濟などから經由してもたらされた手法であり、確かに外来文化を象徴するような屋根構造である。ただし、檜皮葺きとみられる平安宮の内裏でも、大棟などは軒瓦や熨斗瓦などの瓦を用いる葺棟の構造を採っていたものと推測される。つまり、内裏に典型的に想定される屋根構造は、その表現形態において日本的な側面はあるのかもしれないが、外来文物の導入があって初めて成立しうる形といえるのであって、伝統だけに根差すものではない。

このようにみえてくると、大臣大饗などを構成する白色土器や檜皮葺きは、単色で簡素な装いではあるが、日本古来の伝統という表現で捉えるべきではないことになろう。それはむしろ、外来文化を受容あるいは吸収しようとした上での日本化、和風化の姿とでも言うべきではないだろうか。

⑥……………儀式装置の時期的変化と継承のされ方

さて、以上見てきたような2種の性格を持つ饗宴の舞台装置に関しては、その様相に時期的な変

化がみられる点も注意すべきところである。

節会が行われる場であった豊楽院や神泉苑では、次第に節会が行われなくなり、その場は内裏へと移行するようになる。『日本紀略』寛和元年（985）11月20日条によれば、豊楽院は10世紀後半にはあまり使用されず、一時荒廃していた。さらに、11世紀にはかなり荒廃が進んでいたようであり、出土瓦としては12世紀に下るものも見受けられるが、量的にみても再建の積極的な証拠にはなっていない（註47）。

豊楽院と同様に節会が行われていた神泉苑でも、やはり節会が行われなくなり、その場は内裏の紫宸殿に移る。そして、神泉苑は仁寿・斉衡期には離宮としても使われなくなり、請雨修法の場などとして機能するようになる（註48）。豊楽院と同じような方向性を辿ると言ってよいだろう。それに対して、内裏は紫宸殿が9世紀後半から10世紀にかけて儀礼の場の中心となっていく（註49）。つまり、節会は次第に唐風であることが重要視されなくなっていき、むしろ内裏のような場での饗宴が重視されていくのである。そして、それが後の時代にも受け継がれていくことになる。

この点は宴会の構成内容においても相通ずる側面を有している。熊倉功夫氏は宴会が酒礼、饗膳、酒宴の3つから成り立っているが、その3部構成が完成しているのが大臣大饗であって、酒礼と芸能を饗膳中に組み込み、直会的性格の強いのが節会であるとしてその両者を対比している（註50）。つまり、宴会の構成内容あるいは順序において伝統的側面を残すものが節会の方であって、むしろ後世に受け継がれるのが大臣大饗といえるのである。

また、倉林正次氏により指摘されたように、大臣大饗において「神迎え」に相当するものとして伝統的要素と評された内容についても、その一方で田楽の「中門口の芸」などに受け継がれている。その点でも、大臣大饗の要素は後世に継承されるべき内容のものを含んでいたといえるであろう。

このような側面は、出土品の上でもまさに当てはまることである。まず豊楽院の出土瓦からすると、中期段階、すなわち9世紀後半から10世紀にかけての瓦は、瓦全体の主体を占めるほど大量に出土している。その中には、朝堂院出土瓦と同範品も多いものの、朝堂院では緑釉瓦であっても豊楽院では無釉になっていることが確認できる（註51）。これは、節会の場が豊楽院から移ってしまうことと対応する現象であろうし、唐風の国家的饗宴の場を形成することに主たる関心が失われていったことが明瞭に読み取れるだろう。また一方で、朝堂院でまがりなりにも緑釉瓦葺きが維持されようとしたことには、朝賀たる場としての位置が存在したことと、節会より唐風であることがその性格上求められていたことを示唆するものであろう。

しかも、緑釉瓦の意味合い自体としても、変化を来すことになる。例えば、9世紀末～10世紀初めに建立された仁和寺円堂では緑釉瓦が葺かれている（註52）。それ以前にも、東寺や西寺で緑釉瓦が使用されることはあったが、権力中枢である朝堂院や豊楽院での緑釉瓦葺きが途絶える時期に、仁和寺で大量に緑釉瓦を葺いているわけだから、緑釉瓦が国家的儀式の場を彩る舞台装置から変質してしまったと言わざるを得ない。さらに、長保4年（1002）に落慶法要が行われた法成寺でも一部緑釉瓦が使われていたようだが（註53）、これも仁和寺で葺かれていたことと相通じるものであって、もはや弘仁期に見られた様相とは大きく変貌しているのである。しかも、仁和寺が醍醐天皇や宇多上皇によるものとすれば、法成寺は藤原道長の建立であるから、その意味でも従来の天皇を頂点とする秩序形成に位置した存在とは異質であることが明らかであろう。

一方の緑釉陶器についても、9世紀後半以降消費量は激増し、平安京ではどの地点を発掘しても土器総量の10%ほどを占めているというように、かなりの普及を見せている(註54)。また密教法具的な器形が出現するなど多様な用途を帯びるようになり、全国的に普及するようになる。このように、緑釉陶器の性格としては必ずしも儀式や饗宴用の容器に限定されなくなり、儀礼的な特殊な位置から次第にはずれていくことになるのである。そして、緑釉陶器は11世紀前半代でほぼ生産が途絶してしまう。

これに対し、白色土器は平安宮などきわめて限定された地域においてのみ、10世紀頃からその出土が目立ってくる。おそらく、その頃に固有の饗宴などで用いられるという機能が白色土器に付与されて、それが重視されるようになってきたのであろう。これに対応するように、文献史料においても、10世紀頃から「様器」の用例を確認できるようになる。そして、白色土器生産は緑釉陶器生産が終焉を迎えた後も、生産量としては必ずしも多くはないものの、命脈を保っていくことになる。その生産量が少ないことは裏を返せば、平安京内での限定的な儀式的性格が少なからず維持されていたことを示すものであろう。白色土器生産は、おそらく平安京北郊の栗栖野の地でかなり閉鎖的に継続されていたようであり、それも製品の性格の一端を示すものといえる。この点の動きは、緑釉陶器とむしろ対照的である。

このように、平安宮内では緑釉陶器から白色土器へと重視される対象が移っていくこと、しかも前者が早く性格を変質していくのに対し、後者は以後も儀式用容器的な性格をほぼ維持しながら中世以降まで継続的に使用されていくのである。この状況を先ほどの饗宴の内容やそれが執り行われる場の推移などと重ね合わせてみれば、実に連関しながら移り変わっていくことが明確にわかるであろう。

⑦……………儀式装置からみた価値観の変容と各地での受容度

先に確認したように、緑釉陶器や緑釉瓦が多色彩で唐風指向を象徴するものであるとすれば、白色土器や檜皮葺きは単色彩で簡素な和風傾向の産物といえる。そう考えれば、前節で辿った時間的推移は、弘仁期頃に最高潮に盛り上がった唐風化の流れが、次第に和風化方向へ押し戻されて安定していく経過を跡付けるものともいえるだろう。そして、多色彩の酒礼から単色彩の酒礼への動きの中には、10世紀頃から単色で簡素な在り方に重きを置く価値観が生まれていったことを示唆するものでもある。儀礼を彩る装具には、その儀礼の質や性格がかなり直接的に反映しており、さらにそこには時代の指向も映しだされていることが理解されよう。

ただし、今述べた時代の指向の推移は、あくまで平安宮での儀式や上級貴族による儀式に現れた一面である点にも注意しておくべきである。確かに先述のように、緑釉陶器など唐風の食器は平安京ではかなりの普及を見せている。しかし、平安京外での緑釉陶器の出土は9世紀後半以降、国府周辺域ではかなり目立ってくるものの、誰もが使用できるものではない。官衙での公的使用以外には、おそらくごく一部の官人や富豪層が入手しうる高級食器であったと想定される。つまり、唐風の食器は地方の広い層までも普及したのではないのである。そのことは、民衆レベルにおいて唐風の儀式や唐風重視の価値観の普遍化は達成されていなかったことをも暗示させるものであろう。

また、緑釉陶器以外の土器も視野に入ると、平安京やその他の各地では10世紀後半頃に中国文物である青磁などの深椀を緑釉陶器や灰釉陶器、さらに黒色土器や土師器などまでもが模倣する状況となる。したがって、平安宮内裏などでの白色土器の重視の一方で、10世紀段階でも各地において多色彩で中国起源の椀皿形態の食器が好まれ、根強い中国指向が存在することは否定できない。むしろその時期になって、9世紀初めに現れる唐風文化が変容した形ながらある程度の浸透を見せると言ったほうがよいだろう。それに貴族にとっても、中国陶磁器などの輸入品を嗜好していたことが知られるように、10世紀頃に中国文物へのあこがれが解消していたわけでもないのである。

10世紀の白色土器の存在あるいは和風化の動きは、中国文物模倣一辺倒的な色彩が濃かった在り方から、それと異なる簡素な面にも新たな価値観が確認されるようになったことを示すのであって、中国指向が消滅したのではないのである。しかも、白色土器重視にみられる価値観は、その消費から窺われるようにあくまで平安宮やその他上級貴族などごく限られた人々に受容されていたものである。

白色土器の台頭に遅れること1世紀余り後に、緑釉陶器や灰釉陶器を含めた多色彩で構成される食器様式が崩壊する。これには、生産側の要因が大きいものと筆者は判断しているが、内裏などで先行する簡素な食器を是とする価値観の動きが底流にあって、それが11世紀には多色彩の食器なしでの在り方を受容できるようになっていたとも言えるかもしれない。内裏などでの和風を重んじる価値観の普及にも、やはり中央と地方では時間的なずれが存在したとでも言うべきであろうか。このようにみえてくると、儀式的受容形態を各地でしかも時間軸に沿いながら把握する意味で、考古資料が研究に貢献しうる側面は少なくない点が確認できるであろうし、今後それが重要な意味を持つてくるはずである。

さて、11世紀中頃の緑釉陶器衰退後の白色土器は、13世紀後半代まで生産が存続する。白色土器生産がちょうど終焉を迎える頃に出土しはじめるのが、いわゆる「白土器」である。白土器と白色土器は、いずれも白色を呈する素焼きの焼物という点で共通しており、文字だけを並列すれば一見紛らわしいが、形態としては明らかに異なるものである。それに、白色土器はロクロ成形で緑釉陶器の技術系譜を引くものであるが、白土器の成形法は非ロクロで従来の土師器の系譜であることから、成形技術としても異系統のものである。

しかし、確かにその白さという特徴では酷似しており、白色土器の衰退期に白土器が出現することや他にその技術を求められないことから、白土器の白色に焼き上げる技術は白色土器に由来するものと推測される。しかも、かわらけ（土器）が室町期の文献などでは「式三献」で使用されるなど、儀式的な色彩の強い場面で使用されており、使用形態としても白土器が白色土器の性格を受け継いでいる可能性が高い。そう考えれば、この白土器という「かわらけ」の存在によって、古代からの宮廷儀礼用具が変質を受けながらも命脈を保つことを見て取ることができるだろう。その点で、10世紀頃の平安貴族の儀式体系と価値意識は、変容が加わりながらもその後の儀式的規範になったことを、儀式用具のごく一面のみからでも窺いうところである。

以上、出土資料のなかでも普遍的な土器や瓦という儀式装置の側面から、儀式の場がいかに彩られてきたのか、その性格と時期的な変化を辿ってきた。本稿で取り上げたのは緑釉陶器・緑釉瓦や白色土器など限られた資料であったが、それらの資料の中にも儀式とその場の特徴が明瞭に示され

ているのが明らかになったものと思う。考古資料から権力表象の場を考えるこれまでの取り組みは、宮内の大極殿や朝堂院など遺構の側面から空間的な復原を行うことに関心の主体があったようだが、遺物を含めた総体として検討を進めることが今後ますます必要になってくるであろう。本稿の粗雑な素描も、そのための捨て石にでもなれば幸いである。

(国立歴史民俗博物館考古研究部)

なお、本稿は国立歴史民俗博物館共同研究「権力表象の場と儀礼」最終研究会における当日の発表要旨を骨子としつつも、その後の知見などを多少加えてまとめなおしており、タイトルも変更している。また、本稿の内容の一部については、註に示したいいくつかの論文として別に発表を行っているので、併せて参照願いたい。

註

- (1) — 「瓷器」「青瓷」の実体に関しては、拙稿で再検討を試みたので、詳しくはそれを参照されたい。高橋照彦「瓷器」「茶碗」「葉碗」「椀器」考—文献にみえる平安時代の食器名を巡って—(『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集, 1997年)。
- (2) — 高橋照彦「瓷器」「茶碗」「葉碗」「椀器」考—文献にみえる平安時代の食器名を巡って—(前掲)ならびに高橋照彦「平安初期における鉛釉陶器生産の変質」(『史林』第77巻第6号, 1994年)参照。
- (3) — 『西宮記』巻1正月節会, 『北山抄』巻1正月元日宴会事, 『江家次第』巻1正月元日宴会, 同3正月踏歌ほか。
- (4) — 一般に、宴会の中で膳に杯と銚子を置き、酒三盃をすすめて膳を下げるのが一献で、同様にあと二度にわたり酒がふるまわれて三献となる。
- (5) — 倉林正次『饗宴の研究』(桜楓社, 1965年), 赤木志津子「平安時代の宴」(『摂関時代の諸相』, 近藤出版社, 1988年)ほか。
- (6) — 『西宮記』巻1正月御薬事, 『江家次第』巻1正月供御薬ほか。
- (7) — 『江家次第』巻8七月乞巧奠。
- (8) — 上村和直・吉崎伸「左京二条二坊(2)」(『京都市埋蔵文化財研究所『昭和57年度京都市埋蔵文化財調査概要』, 1983年)。
- (9) — 『日本紀略』弘仁7年8月丁巳条, 同8年4月壬辰条, 同10年10月乙卯条, 同11年8月丙戌条ほか。
- (10) — 高橋照彦「古代施釉陶器の模倣対象—磁器か金属器か—」(『歴博』第55号, 1992年), 高橋照彦「土器様相からみた桓武朝」(『考古学ジャーナル』399, 1996年)ほか。
- (11) — 古瀬奈津子「唐礼継受に関する覚書—地方における儀礼・儀式—」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第35集, 1991年)。
- (12) — 伊藤博幸・佐久間賢・土沼章一「胆沢城東方官衙地区出土の施釉陶器」(『考古学雑誌』第70巻第1号, 1984年), 岩手県水沢市教育委員会「胆沢城跡—昭和58年度発掘調査概報—」(1984年)ほか。
- (13) — 例えば、胆沢城出土の漆紙文書から、胆沢城において祝奠の儀が行われていたものと想定され、『類聚三代格』貞観18年(876)6月19日官符によれば、国庁で行われる吉祥悔過の法会が鎮守府内でも行われていることがわかる。平川南「胆沢城出土の漆紙文書」(『えとのす』26, 1985年), 平川南「古文孝経写本—胆沢城跡第二六号文書—」(『漆紙文書の研究』, 吉川弘文館, 1989年, もと「胆沢城跡第43次調査出土漆紙文書」(水沢市教育委員会「胆沢城跡—昭和58年度発掘調査概報—」1984年))。
- (14) — 今泉隆雄「蝦夷の朝貢と饗給」(『東北古代史の研究』, 吉川弘文館, 1986年)。
- (15) — 八木光則氏は、多量の灰釉陶器や緑釉陶器・輸入陶磁器が出土した南東官衙を饗応などをもっぱらおこなっていた官衙と推測している。なお、八木氏はその陶磁器の年代的な位置付けとして、「主体はほぼ9世紀後半で、その前後の時期のものは少ない」としている。確かに9世紀後半のものもあるが、本文中にも記したように、むしろ9世紀前半にまで遡りうるものがまとまっている点に注目すべきであろう。八木光則「奥六郡・山北三郡の城と柵」(『歴史評論』No.535, 1994年)。
- (16) — 後述するように、新たな平安期緑釉陶器生産が弘仁6年頃成立するが、胆沢城に鎮守府が移されるのもその弘仁6年頃と推測されており、ほぼ時を同じくしている。その点で、国家的儀式用具として産み出されたばかりの緑釉陶器が送り込まれる地方への供給先として、まさに新たに重要な役割が付与されたばかりで、しかも国家的な関心の最も強い地域にある胆沢城が選ばれたの

は、けだし必然と言うべきであろう。阿部義平・永嶋正春「徳丹城とその施釉瓦について」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第6集, 1985年)。

(17) — 高橋照彦「平安初期における鉛釉陶器生産の変質」補論(『中世土器研究』第76号, 1995年)。

(18) — 正倉院事務所『正倉院の陶器』(日本経済新聞社, 1971年)ほか。

(19) — 高橋照彦「平安初期における鉛釉陶器生産の変質」(前掲)表1参照。

(20) — 高橋照彦「平安初期における鉛釉陶器生産の変質」(前掲)。

(21) — 平安博物館『平安京古瓦図録』(雄山閣出版, 1977年), 植山茂「平安宮所用瓦の様相」(『角田文衛博士古稀記念 古代學義論』, 1983年), 植山茂「平安宮豊楽院の瓦」(『ひろたコレクション 古瓦図考』, ミネルヴァ書房, 1989年)ほか参照。

(22) — 奈良時代の施釉瓦に関しては, 中井公「瑠璃瓦雑考—平城宮出土施釉瓦の製作技術」(『花園史学』第8号, 1987年)などを参照。

(23) — 上原真人氏は, 近代の施釉瓦の機能として凍害を受けにくいことが挙げられるが, 古代日本の施釉瓦では凍害を受けやすい平瓦に施釉していないことから, 凍害対策を目的とはしておらず, 建物を飾り立てることに目的があったという結論を導いている。平瓦に施釉しないのは厳密に言えば平安以降とすべきだが, 奈良時代の施釉瓦では屋根のごくごく一部に葺かれるに過ぎなかったと判断され, やはり古代全般にわたり施釉それ自体には耐久性などの使用上の有用性より装飾的效果が求められていたものと判断すべきであろう。上原真人「前期の瓦」(『考古学協会・古代学研究所『平安京提要』, 角川書店, 1994年)。

(24) — 山中章「長岡京から平安京へ—都城造営にみる律令体制の変質」(『新版 古代の日本』6<近畿II>, 角川書店, 1991年)。

(25) — 高橋照彦「平安初期における鉛釉陶器生産の変質」(前掲), 高橋照彦「土器様相からみた桓武朝」(前掲)。

(26) — 緑釉陶器の萌芽的変質は長岡京期には既に始まっているが, 緑釉瓦が葺かれるようになるのは平安京遷都以後であり, 同じ桓武朝といえども若干の時期的な差は認められる。

(27) — 桓武朝の唐風文物模倣に関連して, 山中章氏の所説に触れておきたい。山中氏は, 長岡京期前後の新たな土器様相として緑釉陶器・「原始灰釉陶器」・黒色土器

の出現に注目し, そのそれぞれを青磁・白磁・黒陶の模倣と判断している。確かに, 色調が豊富になることの背後には, 中国的な様相を窺わせる動きとして興味深いところである。ただし, 緑釉陶器の形態は白磁に酷似例があるように単純には青磁模倣といえず, 釉調としても淡緑色であって青磁の釉色とは必ずしも近くない。また, いわゆる原始灰釉陶器についても, 供膳具はほとんど見当たらず, 供膳形態を主とする白磁とも対応しない。それに「原始灰釉陶器」の壺類などの器種は基本的に須恵器の伝統的な形態である。したがって, 「原始灰釉陶器」を白磁模倣と呼ぶことはできない。残る黒色土器も碗は土師器にみられる形態であって, 輸入陶磁器模倣とはできないだろう。このように, 桓武期には, 緑釉陶器に先駆的に中国文物模倣が始まるが, それは他の土器生産の性格にまで及ぶものではないといえる。それに, 緑釉陶器でも桓武期に出現する新器種は後に続くものではなく, 生産地や生産量の拡大など奈良三彩と一線を画することになるのは弘仁期である。緑釉陶器が国家的饗宴にまで取り上げられるのも, 先述のように弘仁期と判断される。つまり, 緑釉陶器から見限り, 延暦期には唐風への萌芽的な動きがみられるが, そこをワンステップ乗り越え, 舞台装置の全面的な変革として唐風化路線を展開するのはやはり弘仁期というべきであろう。山中章「長岡京の施釉陶器」(『古代の土器研究会『古代の土器研究—律令的土器様式—』, 1994年), 山中章「桓武朝の日本社会」(『考古学ジャーナル』399, 1996年)。

(28) — 奈良時代の施釉瓦では, 例えば京都府木津町の樋ノ口遺跡から三彩瓦が出土している。伊野近富「樋ノ口遺跡発掘調査概要」(『京都市府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査概報』第48冊, 1992年)。

(29) — 阿部義平・永嶋正春「徳丹城とその施釉瓦について」(前掲)。

(30) — 山中敏史「国衙・郡衙の構造と変遷」(『講座日本歴史』2, 東京大学出版会, 1984年)。阿部義平「国庁の類型について」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第10集, 1986年)ほか。

(31) — 古瀬奈津子「唐礼継受に関する覚書—地方における儀礼・儀式—」(前掲)。なお, 古瀬氏の所説に対しては, 加藤友康氏が, 国庁の構造の変化を単に唐風化で捉えるのではなく, 当時の国・郡行政との連関を考えるべきではないかとしている。加藤友康「国府と郡家」(『新版 古代の日本』7<中部>, 角川書店, 1993年)。

(32) — 『日本後紀』大同元年(806)5月14日条。

(33) — 高橋照彦「「瓷器」「茶碗」「葉碗」「様器」考—

文献にみえる平安時代の食器名を巡って―」(前掲)。

(34) ―高橋照彦「「瓷器」「茶碗」「葉碗」「様器」考―文献にみえる平安時代の食器名を巡って―」(前掲) 参照。

(35) ―平尾政幸「平安時代前期の土器」(勸京都市埋蔵文化財研究所『平安京右京三条三坊』, 1990年), 平尾政幸「緑釉陶器・灰釉陶器・白色土器」(勸古代学協会・古代学研究所『平安京提要』, 角川書店, 1994年) ほか。

(36) ―倉林正次「祭りの構造 饗宴と神事」(NHK ブックス238, 1975年) 152頁。

(37) ―倉林正次「正月儀礼の成立」(『饗宴の研究』儀礼編, 桜楓社, 1965年)。

(38) ―上原真人氏は, 平安京の上級貴族の邸宅建物が瓦葺きではなく檜皮葺きであり, 大棟に軒瓦などを葺く葺棟であった点を指摘している。上原真人「平安貴族は瓦葺邸宅に住んでいなかった―平安京右京一条三坊九町出土瓦をめぐって―」(『高井悌三郎先生喜寿記念論集 歴史学と考古学』, 1988年)。

(39) ―上村憲章・小森俊寛「平安京左京三条一・二坊・神泉苑跡・史跡旧二条離宮」(勸京都市埋蔵文化財研究所『平成3年度京都市埋蔵文化財調査概要』, 1995年)。

(40) ―緑釉瓦が葺かれた建物の位置づけを考えるために, 平安京内に置かれた西鴻臚館の出土資料は興味深い。西鴻臚館の発掘に伴う出土瓦の分析結果によると, 平安宮の朝堂院などと同様, 平城宮や難波宮・長岡宮などの所用瓦が大量に搬入されていることがわかった。このように多量の再利用瓦が用いられたことは, 平安京造営に当たって優先的に鴻臚館が築かれていたことを示しており, その施設としての存在が重要視されていたことが窺える。しかし, 朝堂院などでは緑釉瓦が出土しているのに対し, 西鴻臚館の発掘では緑釉瓦が出土していないのである。ということは, 弘仁期かとみられる緑釉瓦化に象徴される修造が鴻臚館には及ばず, 緑釉瓦が葺かれなかった可能性が高い。そうすると, 緑釉瓦が葺かれたとみられる建物の多くは朝賀や節会の行われた場であるので, 国家的に重要であっても唐風の国家的儀式・饗宴が直接行われないがために鴻臚館では緑釉瓦化が推進されなかったのではなかろうか。そして, 外国使節の滞在所との格差を付けることの方が, むしろ蕃客に対してもその効果をより発揮しようと想定された可能性もあるだろう。鈴木久男「平安京右京七条一坊の軒瓦について」(向日市教育委員会「長岡京古瓦聚成」<向日市埋蔵文化

財調査報告書>第20集, 1987年)。

(41) ―元日節会と踏歌節会については, 早くも天長年間以降には紫宸殿で執り行われることになり, 本文中に示したような対応関係は崩れることになる。しかし, 新生の緑釉陶器の成立が弘仁期であることなどを考えあわせれば, 嵯峨天皇としては唐風の建物で唐風の衣装を着た官人が唐風の器を使って唐風の饗宴を行うといった徹底した唐風化を企図していたことはほぼ間違いないであろう。おそらくそれが本来あるべき姿であったのだが, これまでの儀礼文化の伝統の中で嵯峨の意思は必ずしもそのままの形で定着しなかったというべきではなかろうか。神谷正昌「紫宸殿と節会」(『古代文化』第43巻第12号, 1991年) 参照。

(42) ―厳密には, 節会など朱漆器を用いる酒礼, 大臣大饗など様器を用いる酒礼, 旬日など土師器を用いる酒礼の三区別のほうがよりふさわしいかもしれない。

(43) ―倉林正次「祭りの構造 饗宴と神事」(前掲)。

(44) ―東亜考古学会『東京城 渤海國上京龍泉府址の發掘調査』<東方考古學叢刊 甲種>第5冊(1939年, 復刻, 雄山閣出版, 1981年) ほか。

(45) ―金子裕之「8・9世紀の漆器―身分表示の食器―」(奈良国立文化財研究所創立40周年記念論文集刊行会『文化財論叢』II, 同朋舎出版, 1995年)。

(46) ―上原真人「平安貴族は瓦葺邸宅に住んでいなかった―平安京右京一条三坊九町出土瓦をめぐって―」(前掲)。

(47) ―植山茂「平安宮豊樂院の瓦」(前掲)。

(48) ―太田静六「神泉苑の研究」(『寝殿造の研究』, 1987年)。

(49) ―神谷正昌「紫宸殿と節会」(前掲)。

(50) ―熊倉功夫「日本料理における献立の系譜」(『論集 東アジアの食事文化』, 平凡社, 1985年)。

(51) ―植山茂「平安宮豊樂院の瓦」(前掲)。

(52) ―木村捷三郎「仁和寺出土の瓦」(『仏教芸術』115, 1977年), 勸京都市埋蔵文化財研究所『仁和寺境内発掘調査報告―御室会館建設に伴う調査―』(1990年) ほか。

(53) ―平安博物館『平安京古瓦図録』(前掲), 上原真人「古代末期における瓦生産体制の変革」(『古代研究』13・14, 1978年) ほか。

(54) ―平尾政幸「平安時代前期の土器」(前掲), 平尾政幸「緑釉陶器・灰釉陶器・白色土器」(前掲) ほか。